政界往來

創刊40周年記念 第一特集 八月号

第三十五卷第八号（毎月一回一日発行）昭和二十六年十一月十九日第三種郵便物認可
昭和四十四年七月二十日印刷 昭和四十四年八月一日発行
昭和二十六年九月四日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第二〇六六号

れは、自分が健康な者と自惚れることによってその罰として天国に住む権利を失っている。われわれはみんな〝エデンの東〟に放逐され、追い出されている。罪に堕ち、暗黒と荒廃のなかをさまよっている。われわれにはどこか健康なところがあるであろうか。われわれが負い回わっている傷われわれの肩にくい込む重荷、生の重荷、家族の重荷――〝父の日〟というのがあるが、この白髪としわはそれを背負ってきたしるしだ――そしてわれわれの生につきつけられている謎。もしこれらを自分の確信や思想、敬虔の幻想で蔽うて自分を健康な者の側に数えていたら、どうであろうか。もしわが同胞、同僚、隣人の一人でもが病んでいるとしたら、またもし戦後日本人の立上るためにあのように無私的愛を示したアメリカの友人の良心である人が殺され、かれらの社会が病んでいるとしたら、われわれは無責任にも無苦無憂の中に自分を健康な人の側に数えることができるであろうか。既に洗礼をうけてキリスト者と名のる人が、そのキリスト者という名を恥じて、この世の人々の無神性が彼らのうちに突破してくる。そして、その無神性はわたし自身の無神性の大写しにされたものであるとすれば、どうしてわたしだけが信仰や救いに安閑としておられようか。エフトセンコのいう≪深く深く恥じ入ること≫すなわち悔改め・回心がいる。

福音書記者のルカはとくに回心に興味をもった。ルカ伝五章のペテロの召命では「主よわれを去り給え、われは罪ある者なり」と叫ばせ、同一九章のザアカイのイエスとの出会いでは、彼は桑の木の上の高い所から低い所に、高慢から謙卑に引き下ろされねばならない。「わたしが来たのも、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔改めさせるためである」この病める現代の只中に、われわれの真中にイエス・キリストが来た。癒すかたはただひとり、神の謙卑・あわれみ・柔和そのものであったかたに目を上げる以外にはない。

われわれは病んでいる、失われているという≪病者の自覚≫は、癒しを求めて叫ばせる。それた救いにみちた攪乱だといってよい。われわれ現代人はみな病院に入院中である。このことを自覚することが自分について知りうる最上のことである。もしなんらかの道で生の重荷がわれわれに襲いかかってきたら、それこそ、癒しにみちた恵みなのである。「すべて苦しむ者、悩む者、われに来たれ、われなんじらを慰めん」。慰めるとは、癒す・元気を出させるということである。現代の病める諸徴候から、病者の自覚の底をついて一回転し、この真の現実的な、新しい人間に目を上げること、これが現代の救いである。

☆

大学再就職記

相原信作
（甲南大教授）

一年前に国立大学を定年退職したときにはもう二度とふたたび大学の教壇には立つまいと思った私であったが、一年間家にひきこもっているうちにやはり一種の物足りなさを感じるようになった。それで、すすめられるままにまた教師業をはじめる決心をしたのである。家族はこの私の再就職に必ずしも賛成でなかった。このごろの大学はいつなんどき騒動がもちあがるか知れないし、生活だけなら私がつとめなくても何とかなるだろうから、一年前の方針を変更し

ない方がよくはないかというのである。しかし考えてみると、私以上に健康のすぐれない人や年齢のすすんだ人も大ぜい大学にいる。それらの人々も、必ずしもパンのためにのみ老軀に鞭打っているわけではないのである。やはりそれにはそれだけの相当な理由があるのだ。私が一年前に定年退職を機会に大学を去りたく思ったのは、そもそも大学なるものの正体がわからなくなったような気がし、いったん大学から遠ざかって大学を外側から眺めてみたい。と考えたのであった。しかし、一年間なんの束縛もない自由な境遇に身を置いているあいだに、問題の探究はすこしもすすまない。私は、大学問題を正しくつかむためには、大学を退いてこれをより広く大きい立場から見る必要があると思ったのだが、ほんとうは、大学の中にいても、大学の現状にとらわれずに、これを展望することができるはずであった。過去の私のように大学がいやでいやでたまらなかったのは、とりもなおさず大学の現状にとらわれ、身うごきのできないほど大学の既成の型に押しひしがれていたからである。私がこういう人間であるかぎり、大学から飛び出したからといって、決して大学の現状から自由に、大学を広大な遠近法の中において見ることはできないのである。要は、大学を大学の内部から見るとか、外部から見る方がよいとかということでなく、見る者自身がどういう人間であるかということである。大学の現状に恐れをなして逃げ出すだけでは、問題は少しも解けない。

以上のように理詰めで考えた上で再就職にふみ出したわけでもないが、とにかく私は、一度もう大学はこりごりだと感じたにもかかわらず、一年目に早くも節を変じてこの四月からふたたび大学の教壇に立つことになった。そして四月はじめ最初の教授会があるというので私は、はじめてこの学校の門をくぐった。

ところで、いざこうして現実に学校に行き、いよいよ正式の教師として学生たちと相まみえなければならぬときまると、昨年三月大学を退職し、これで学生の前で不得意な弁舌をふるう義務からやっと解放されたと感じたときのすがすがしい軽快な気持とはうらはらの、重苦しい気持が私をおそってきた。私はなぜ一度おろした荷物をもういっぺん肩にかつぐようなことをするのか、家族は私の再就職にむしろ反対だったではないか、今の大学は何となくいかがわしい。正体のはっきりしないものになっているではないか、すなわちそれは単純に学問をする場所であり、学生は純粋に真理を求めるためにやってきていると思えないではないか、私は性こりもなく、そういうところで血気さかんな人々から軽べつと、せいぜい憐びんを得るために登場しようとするのか。

私は、その最初の教授会のあと、その大学の門を出ると、しばらくその附近を歩いたのち神戸に行った。久しくここに来たことがない。元町というようなところはどうなっているだろうか。あてもなく散歩する癖のある私は、夕方まで歩いて、ある喫茶店の前を通り過ぎた。そして二、三十メートル歩いてまた引返してその店に入った。べつにとくにその店に引きつけられたのではない。そのへんには同じような店はいくつもある。ただ何となく私はわざわざ逆戻りして、そこに入ったのである。

☆

店はわりあいに空いていた。先客は、三、四組にすぎない。私はひとつの席に腰をおろして

飲物を注文し、それが運ばれてくるとゆっくり飲みはじめた。

ふと気がつくと、向うのテーブルに、三人の若者がいる。二人は私の方を向いて席を占めており、一人は私に背を向けているから、私から顔は見えない。そのうちに聞くともなしに、三人の会話が私の耳に入ってきた。

はじめは、将来もし適当な仕事がなければ動物園の飼育係になってもよい。というようなことであったので、私もついつい面白くなったのである。そのうちに自然科学の方の議論になったが、私のいま出てきたばかりの大学の教授の名前が現われたので、かれらがその、つまり私のつとめることになった大学の学生であることがわかった。そうわかると急に私は、注意深くなった。そもそも先刻から私の心を圧迫している重苦しい感じは、今度私がいよいよ引受けることになった仕事について、わけてもその肝心な要素である学生について、かれらがいったいどういうものを求めているのか、どんなことに主要な関心をもっているのか、見当がつきかねることに原因している。私が去年大学を定年で退いたとき、いちばんうれしかったのは、正体の必ずしもはっきりしない学生との接触から免れるということであった。比喩は不適当かも知れないが、教師にとって学生は、航海者にとっての海の如きものといえよう。航海者が快適に仕事をしてゆくには、彼にとって海が充分わかっていなければならないだろう。私に対し教師業を不快なものにしたのは、学生という大きな海のような存在が、私の多年慣れ親しんできたものとは、すこしばかり異なったものになってきていることであった。いまや私は、一年ぶりにまたこの不気味な海に恐る恐る船をあやつって出ようとしている。しかしこんどは前の国立大学の場合とちがってそれほどの束縛感はない。前には、とにかく定年まではあたえられた操縦盤にくっついていなければならないような気がしていた。海の模様があやしくなったからといって職場を離れるわけにはゆかなかった。運を天にまかせて、定年という港に無事到着するのを祈るより外なかった。こんどはちがう。こんどは、もうすこし自由だ。原則的には同じ教師であっても前と異なってそれほど窮屈にこの職業にしばられる必要はない。（家族は、むしろやめる方がよいと言っていたのである。）しかしそうはいうものの、私は、教師としてはあくまで学生という存在を正面から相手にし、これと取組みたい。教師になって、学生との接触を避け、通りいっぺんの講義時間だけのノート読みをしてお茶をにごしているのでは、だいいち自分が不愉快である。

それで私は、この大学に来た以上は、この大学の学生を親しく知りたいと思った。そのためにはまず第一に学生と接触しなければならない。いかにすれば学生と接触できるか。私は、今日も、路の上を歩いているこの大学の学生に呼びかけてみようか、と考えた。しかし、そこまでの勇気は出なかった。とにかく、学生を知るには、単刀直入かれらに話をしかけるより外に方法はない。しかしうっかりこの方法を実行すると、かえって逆効果になるかも知れない。

このようなことを色々と考えて、いつものことだが頭の中でぐるぐる回転するのみで、この日も一日暮れんとして、私は重い足を引きずってとうとうこの喫茶店に入ったのである。ところが、なんとそこに、待望の、学生との接触のチャンスが待っ

ていた。しかも、思いがけない仕方で。

☆

私はそれまで、この大学の学生について、学問的能力というにおいて余りかんばしいはなしをきいていなかった。概しておとなしい、すなおな学生が多いということであったが、学問的素質という点では大きな期待をもって臨んではならない、というようなことであった。しかし、いま私の目の前にあらわれた三人の学生は――そしてこれが私の出会う最初の、この大学の学生に相違ないのだが――なかなかどうして、学問的ないみでも相当に水準の高い問題を熱心に論じ合っているではないか。ドイツ文学のこと、トーマス・マンの小説のことが出てくると思うと、最近の物理学や生物学の話になる。私はそれでこれは理学部の学生（この大学には理学部もあるので）かしらと思ったくらいであった。そのうちだんだんと哲学に移り、西田哲学に及んできたので、まったくおどろいてしまったのである。あ

折に思へり

田中御幸

（青雲主宰）

身は痩せてアカザを摘みし人の影なほ眼裏を
過る日のあり

忍従はここにもありと薬莢の落ちゐる側のサ
ルビヤを見き

僅かなる実も待たれたる無花果が忘れられつ
つ古木となりぬ

重心はおのづからなる年輪が支へて風の中な
る古木

怠りし心疼みて展かざる聖堂のふかき塵を払
へり

脱した得手勝手な批評であると思ったので、自分はそういう著者を尊敬できなくなった、と言う。これはちょうどその著者にある時流に乗った学者の本を書店の店頭でのぞいてみたが、西田哲学への批評があった。その批評は西田哲学の重要な論点を逸対する私の見解と一致している。こういうことを言う学生が、初めて出会うこの大学の学生なのである。そして最後に、西田幾多郎の直接の弟子が数少くなった現在、せめて弟子の弟子ともいうべき人から彼の人となりや生活についてくわしくきいてみたいものだ、というような話になったので、私はとにかく西田先生の弟子の一人にちがいないのであるから、このまま黙ってこの場から立去る法はないと判断し、とうとう勇気を出して三人の前にゆき、名乗りをあげたのである。未知の海の不安は消え、親しい仲間にめぐり会った安心がこれにかわった。目の前に、四十年のむかし一人の哲学者を慕って京大に集まった私の若かった同級生たちに似た水々しい青年が忽然と出現したのだ。これは、神が私に私の再就職することになった大学と、その大学生とについての、不吉な先入見を打破するためにあたえたもうた啓示、むしろ奇跡ともいうべきものでなかったか。

私は、私の大学再就職の文字

通りの第一日に全く偶然に、思いがけない仕方であたえられたこのような出来事によって、日本の私立大学についての世間一般の先入見のあやまりに気付かしめられた。大多数の人は、私立大学は、国立乃至公立大学に入学できなかった学生——国公立大学の入学試験に合格できなかった学生——を収容しているという事実から、私立大学の学生は学問的素質において国公立（わけても一流校）の学生よりも劣っているという結論を引出している。つまり、入学試験に合格しなかったことと、学問的素質が劣等であるということとを同一視している。しかし、これほどまちがったことがあろうか。いったい入学試験（しかも外ならぬ今日行われている如き入学試験）が、若者たちの学問的素質の判定になるということが科学的に証明されたとでもいうのであろうか。私たちは、今から三十年も前から入学試験の弊害（入学試験が学問的素質の芽生えをふみにじるということ）について聞かされつづけてきたが、それに対する反論はただ他によりよい方法がないという消極的なもののみで、積極的な反論は現われたためしがないではないか。入学試験に落ちた者が学問的に劣等であるなどという証明は決してできないのである。よく受験生への訓戒として、試験勉強中は「人生とは何か」という類の思索を断念せよ、といわれるが、そもそも世界や人生についての根本の反省思索を放棄して学問があるはずなく、かかる思索をたとえしばらくでも断念し得る人は、学問的素質も秀れないのが普通である。従ってかえって、専心受験勉強に打込んで今日の如き入試に成功する学生は人生問題に悩んで失敗する者よりも学問的に劣る、とさえ言えると思う。もしそうだとすれば、国立入試の失敗者を収容する私立大学は、明日の多望な、学問と思想との苗床として、世間的通念から脱した、全く新らしい光のもとに見られなければならない、と痛感せしめられたのである。

ピープスの日記

八木　毅
（明大教授）

◎

日記はもともと私的な記録であり、自分の思い出や反省のため、あるいは後日の参考のため書き残すものであって、他人に読まれることは予想していないのが普通である。しかし、書き残す以上、いつかは他人に読まれる可能性が大いにある。いや、日記を書く者はみな、いつかは他人に読まれることを予期して書いているのだと、うがった言い方をする人もいる。ところが、ここに、他人にたやすく読まれないよう、工夫を凝らして書かれた日記がある。サミュエル・ピープスという男が書いたものである。彼はこれを速記体で書き、更に解読を困難にするため、その速記体に自己流の変改をいろいろ加えて書いた。しかも、彼はこれを勤め先で、毎日同僚が帰ってしまったあとで書き、ロッカーにしまっておいて、家へは持ち帰らなかったという。家へ持って帰れば、妻の目に入り、うるさく質問されることを恐れたのであろう。

サミュエル・ピープスとは、一六三三年ロンドンの仕立屋の家に生まれ、奨学金を受けてケンブリッジを卒業し、数年後海軍省の文官となり、次第に出世して遂には海軍事務次官を前後十一年間も勤め、代議士に三回当選し、王立科学協会の会長などにも選ばれた人である。だが

往来社だより

★前号の編集完了まぎわのころには本社の事務所移転でごったがえしていたのだったが、あれから一カ月、移転完了後の室内整理なども終って、いまでは新事務所にすっかり落ちついて、営業、編集などの業務を行っている状態。前事務所のあった虎の門からも国会議事堂は眺められたが、今度の新事務所であるTBRビルの六階の窓からは、裏側ではあるが議事堂の建物がまったく目と鼻といった感じの近い距離で眺められる。

★本社の社員たちが通勤に利用するのは地下鉄丸の内線で、駅は国会議事堂前であるが、それにしてもわれわれ本社員が驚ろくことは、朝夕の議事堂前駅の混雑ぶりである。しかもその大群ともいえる通勤者たちのほとんどが、議事堂のすぐ近くにある三つの議院会館の中へ消えてゆくようなのである。国会議員はこの議院会館に室を与えられ、それぞれ秘書を抱えており、なかには一人で数人の秘書を置いている議員さんもいるわけだから、その秘書たちだけでも相当の数であり、ちょっとした群集のカタチとなるのも当然のことである。議員さんもいろいろとご多忙ではあろうが、しかし、その会館の部屋といい、抱えている使用人の数といい、うらやましいかぎりといいたくなる次第である。

★前号でも述べたが、本誌もこの八月号で創刊四十周年を迎えたわけでまずその記念特集の一端として本文四十八頁を増頁し、口絵も小野竹喬、青木大乗両画伯の傑作をもって飾った。また本誌がかつて行った創刊五周年、七周年、十周年の各祝賀会の写真でグラビアを編集したが、この祝賀会には、いまではほとんど他界している政界のお歴々が出席しており、めずらしい写真である。なお本社の建前として、こうした増頁などの場合も定価は普通号通りである。些少ながらのサービスとして自負する次第である。

編集後記

▼本誌の創刊四十周年記念第一特集号の編集を終える。さていつもながらの後記のマクラ言葉だが！延長国会の期日も残り少なになったのに、国会の方はどうもテキパキすんなりとは進んでいないようである。防衛二法は衆院を通ったが、大学立法ははたして今延長国会で陽の目を見ることができるかどうか。佐藤首相は自民党が進めている「暴力学生処罰にかんする議員立法」に関して「学生の有罪無罪がはっきりしない段階で、国家権力によって行政処分するような立法は妥当でない」と、これを認めない方針のようであるし、この状態ではまだまだ迂余曲折の道をたどるものとみてよかろう。

▼本号の対談は二本建てで、まず佐藤総理との「政界今昔談」は、総理の若かりし日から今日にいたるまでのいろんな思い出話をつづったもので、総理の過去を知る資料的な面からしても、なかなか面白いものである。その次は、政治生活五十年という星島二郎元代議士の、これまた遠い過去を探っての回想談である。今日の政界と比較して、共に好個の読物であることまちがいなしである。

▼前述した特集号としての一端に「四十年間の人間群像」をもって増頁の大半を当てたが、これは木舎社長の筆になるもので、本号には四十数名の人物をとりあげている。もちろん人物一人々々については素描であるが、筆者がその人物と知己であったというところに面白味があるわけである。なお本稿は次号第二特集にも連載の予定である。

▼評論では、栗原一夫氏が「保守党よ驕るなかれ」と、与党自民党に対して忌憚のない意見を述べ、七〇年代の政治を切り開く立役者たれと直言している。また福田邦三氏は長年の教育者としての立場から、大学紛争に対していまこそ政治家は躊躇せず起ち上るべきであると意見を開陳している。憲法学者の小森義峯氏は今日の国情を憂えて、終戦の詔勅を分析し、これを国是とせよとの強腰の意見。

▼経済界の動向については、加田泰氏が「昭和元禄のモーレツ経営」と題して、日本の企業の横暴さを最近の自動車業界の不良事件を引例して論破している。その他株式市場の動向、社会開発の問題等等ゆるぎない編集であることを自負する。

政界往来 昭和四十四年八月号

定価百七十円（送料十八円）

一年分 二、〇四〇円
半年分 一、〇二〇円

振替東京二〇九六八番

昭和三十六年十一月十九日第三種郵便物認可
昭和四十四年七月二十日印刷
昭和四十四年八月一日発行

編集兼発行人 木舎幾三郎
印刷人 岡崎正夫
東京都新宿区市ヶ谷台町二二
印刷所 太陽印刷工業株式会社
発行所 株式会社 政界往来社
東京都千代田区永田町二の一〇の二
TBRビル六一四号
電話東京 代表（五八一）七六三一

書店売切れの際は直接本社にお申込を